

「英語教育と e-learning」実践についての一考察

— 過去・現在・未来における視座から —

小林 貢

A Study on Practical English Education of Akita National College of Technology: On E-learning, STEP, TOEIC and Cooperative Education Lecture and MODEL CORE CURRICULUM of KOSEN

Mitsugu KOBAYASHI

(平成24年11月30日受理)

It should be taken into consideration that e-learning and cooperative education lecture by native speaker are the essential tacklings for the Practical English Education of Akita National College of Technology. In addition to that, Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology recommends students to deepen their learning of their special fields and to have the practical English abilities, which Washington Accord and MODEL CORE CURRICULUM of KOSEN also recognize one of necessary qualifications for learning.

The purpose of this report is to suggest an approach to improve the spontaneous English abilities for our students by applying e-learning and cooperative education lecture and other trials based on the ways of thinking of Learner Autonomy, Finland Method, DeSeCo Key competency, JABEE and MODEL CORE CURRICULUM.

We have been making many attempts to establish students' voluntary English learning and let them know the world-wide point of view for engineering design. If they keep studying their specialities autonomously and trying to communicate with foreigners in English, they can contribute to the world as international engineers.

Keywords : Learner Autonomy, e-learning, Cooperative Education Lecture, MODEL CORE CURRICULUM

1. 緒言

秋田工業高等専門学校の英語教育においては、大学入試において英語を受験しない高等教育機関である高等専門学校の学生の、英語学習に対するモチベーションを高める手段の一つとして英語に関する資格試験の受験を奨励している。その経過として本校は平成11年度から平成19年度まで、9年連続して実用英語技能検定奨励賞に選考され、平成20年度には優秀団体賞に、平成21年度には優良団体賞に、平成22年度及び平成23年度には奨励賞に選考された。

平成13年度より英語科は、「実践的英語コミュニケーション能力の育成を目的とする秋田高専英語教

育改善プロジェクト」として本科3年の英語の授業にTOEICの演習を導入し、平成18年度よりTOEICのためのe-learningとしてALC NetAcademyを使用した本科3年と専攻科1年の英語の授業を行った。この取り組みに対してはTOEIC Newsletter 80 (October, 2002) 及び秋田魁新報 (2006年4月26日夕刊) の記事として取り上げられ、一定の評価を受けた。

2. これまでの取り組み

上記のアプローチに加えて、平成19年5月に日本技術者教育認定機構 (JABEE: Japan Accreditation

Board for Engineering Education) に本校の本科及び専攻科の「創造工学システムプログラム」が認定された。認定開始年度は平成18年度であり、同プログラムの修了要件の一つには、「4) TOEICスコアが400点相当の英語能力、あるいは同等の英語能力を有すること。」がある。ちなみに上記の400点相当とは385点以上を意味し、これと同等とは、課題(英作文および英語によるプレゼンテーション)を実施し、これに合格することを意味する。この修了要件をクリアするためにALC NetAcademy2 (NetAcademy改訂版)「初中級コース プラス」は、授業のみならず、学生が、本校の情報処理センター、図書館及び学生寮において自主学習するためのe-learningとして使用されてきた。

平成21年度特別教育研究経費(「国際性の向上に関する改革推進事業」予算配分は2年間)として、筆者を中心とした本校の人文科学系(英語)の「国際的な情報発信のためのe-learningによる人材養成プログラム」が、高専機構から選定された。上記プログラムの概要は、「e-learningによる英語学習に加えて外国人による専門分野に関する講演会により、TOEICに十分対応できる国際的に活躍できる人材の養成を図る。そして、情報発信の推進のための外国人によるライティングのプログラム『情報発信のためのLesson』の演習を行うことで、学生が国際学会等で専門に関する発表をできるための英語力の素地を養成する。」である。

上記プログラムの平成22年度における実施については、専攻科1年前期の応用英語Ⅰ、専攻科1年後期の応用英語Ⅱ及び専攻科2年前期の応用英語Ⅲに全面的にALC NetAcademy2「スーパースタANDARDコース」を導入した。そして、本科4年の電気情報工学科及び物質工学科の総合英語Ⅰ(通年)においてライティングを指導するために、ALC NetAcademy2「ライティング基礎コース」を導入した。これについては1年間の学習で両クラスの学生の中には最高でTOEICスコアが180点向上した事例もあった。それに加えて、本科5年の物質工学科の工業英語(後期)においてALC NetAcademy2「技術英語パワーアップコース」を導入し、シラバスに基づき演習を行った。本科4年、5年及び専攻科1年、2年の自主学習教材として、「TOEIC(R)テスト演習2000コース」を導入することにより、「スーパースタANDARDコース」を完了した学生のTOEICテストに対するモチベーションを更に高めた。これらに加えて、ネイティブの大学教員である国際教養大学 助教 Dr. Andrew

Crofts先生を講師に招聘した専門分野に関する講演会"Biotechnology:Solving the World's Biggest Problems"(2011年1月20日)を実施することにより、学生が国際学会等で専門に関する発表をできるための英語力の素地を養成した。講演会については、秋田魁新報(2011年2月3日)に記事として取り上げられた。

3. これまでの成果

e-learningによる英語学習により、TOEICスコアが向上することで、英語を使用する事象に対して十分対応できるようになり、国際的に活躍しえる人材を養成できるようになるならば、また情報発信の推進のためにライティングのプログラムの演習を行うことで、学生が(短期留学を含む)留学する機会を得たり、国際学会等で専門に関する発表を出来るようになるならば、その過程自体がe-learningによる英語学習の有効性を証明すると考えられる。国際教養大学 教授 Dr. Kirby Record先生を講師に招聘して、平成22年3月に実施した『情報発信のためのLesson』に参加した学生1名は、ルールA技術短期大学(フランス)に短期留学し、平成23年度には国際学会において発表を行った。『情報発信のためのLesson』については、秋田魁新報(2010年4月8日)に記事として取り上げられた。

「創造工学システムプログラム」の修了要件については、ほとんどの専攻科修了学生が上述の条件をクリアした。具体的には、クリアできずに課題に取り組んだ専攻科生は、平成18年度は18名中1名、平成19年度においては28名中0名、平成20年度は23名中2名、平成21年度は27名中1名、平成22年度は25名中0名、平成23年度は26名中0名であった。

それらに加えて、平成18年度において専攻科の評価指標である大学院におけるTOEIC平均スコア479点を超えた専攻科生は7名おり、最高点は635点であった。平成19年度の大学院におけるTOEIC平均スコアの484点を超えた専攻科生は5名おり、最高点は660点であった。平成20年度の大学院におけるTOEIC平均スコアの491点を超えた専攻科生は6名おり、最高点は745点であった。平成21年度の大学院におけるTOEIC平均スコアの494点を超えた専攻科生は7名おり、最高点は855点であった。平成22年度の大学院におけるTOEIC平均スコアの507点を超えた専攻科生は7名おり、最高点は『情報発信のためのLesson』に参加した学生の720点であった。平成23年度においては基準が大学院4年の

平均スコアに変更となり、平均スコア593点を越えた専攻科生は1名で、最高点は620点であった。プロジェクトの成果については、平成23年度に高専改革推進経費事例発表会（於：鹿児島大学）において発表し、『文部科学時報3月号』に掲載された。

特に全年度の全クラスにおいてTOEICスコア平均点が400点以上、全年度の全クラスにおいてクラス毎の最高点がTOEICスコアが500点以上であったことはe-learningの取り組みとして評価された。また国際教養大学との交流や秋田魁新報への掲載は地域的な取り組みとして評価された。以下は『文部科学時報3月号』（2012年3月10日）（上）及び秋田魁新報2011年2月3日（下）の記事である。



4. 平成24年度における取り組み

4.1. 国際教養大学との交流の継続

平成21年度及び平成22年度における国際教養大学との交流を平成24年においても「創造教育支援経費」により継続して行う。事業名は『「国際的な情報発信のためのe-learningによる人材養成プログラム」におけるCooperative Education』であり、事業目的は「平成24年度においては、専門授業である5年物質工学科生物コースの『蛋白・遺伝子工学』の授

業内容に関するCooperative Educationを日本人専門教員とネイティブの大学教員の平易な英語によるTeam Teachingで実施することにより、学生が国際学会等で専門に関する発表をできるための英語力及びプレゼンテーション能力の素地を養成する。」である。プログラムの内容は「秋田工業高等専門学校5年物質工学科生物コースの授業『蛋白・遺伝子工学』において「遺伝子操作」の内容について教科担当の伊藤浩之先生と国際教養大学Dr. Andrew J. CROFTS先生がCooperative Educationを行うことにより、学生が国際学会等で専門に関する発表をできるための英語力及びプレゼンテーション能力の素地を養成するための授業とする。学生は事前の準備を十分に行う。CROFTS先生との打ち合わせは事前に行った。具体的な実施日時は平成24年12月10日（月）及び平成24年12月17日（月）における14：55～16：35（7、8時限）である。」本原稿の提出期限と実施日時の関係により、実施についての報告は次の機会とする。

4.2. TOEICへの取り組み

4.2.1. 専攻科1年・応用英語Ⅱ

平成24年度専攻科1年・生産システム工学専攻及び環境システム工学専攻を対象とした応用英語Ⅱ（後期木曜日1、2時限実施）においては、「産業社会におけるグローバル化に対応するため、国際的に通用するプレゼンテーション能力を修得するための英語によるコミュニケーションに必要な基本的能力を身につける。」ことを「授業の目標と概要」として、「授業の進め方」は「演習形式で行い、2週に1回のペースで補助教材による単語小テストを実施する。尚、E-Learningは課題及び小テストに使用する。」としている。

以下の図のように自学自習に係わる課題を設定し、全学生に「自学自習に係わる課題提出の一覧表」として平成24年9月27日に配布した。自学自習に係わる課題はJABEEに基づいて設定された自学自習時間60時間を超えた63時間で設定している。ALC NetAcademy2の課題は、「スーパースタANDARDコース Listening/Reading」からの出題であり、単語テスト準備の課題は、補助教材「即戦ゼミ8 大学入試基礎英語類出問題総演習」（上垣暁雄編著桐原書店）からの課題である。また、教科書課題はPreparation Course for the TOEIC Test (Akira Morita 他 SEIBIDO) からの出題である。

年月日 (小テスト日)	課題内容(予習等を含む)	時間	教員 確認	課題 番号
9月27日 (10月18日)	単語テスト 準備 課題 範囲pp.148-169.	4		1
9月27日	NetAcademy2 課題 Unit 21	1		2
9月27日	NetAcademy2 課題 Unit 22	1		3
9月27日	教科書 課題 Unit 1, Unit 2 予習	2		4
10月11日	NetAcademy2 課題 Unit 23	1		5
10月11日	教科書 課題 Unit 3 予 習	1		6
10月18日	NetAcademy2 課題 Unit 24	1		7
10月18日	教科書 課題 Unit 4 予 習	1		8
10月18日 (11月8日)	単語テスト 準備 課題 範囲pp.170-191.	4		9
10月25日	NetAcademy2 課題 Unit 25	1		10
10月25日	教科書 課題 Unit 5 予 習	1		11
11月1日	NetAcademy2 課題 Unit 26	1		12
11月1日	教科書 課題 Unit 6 予 習	1		13
11月8日	NetAcademy2 課題 Unit 27	1		14
11月8日	教科書 課題 Unit 7 予 習	1		15
11月8日 (11月22日)	単語テスト 準備 課題 範囲pp.192-213.	4		16
11月15日	NetAcademy2 課題 Unit 28	1		17
11月15日	教科書 課題 Unit 8 予 習	1		18
11月22日	NetAcademy2 課題 Unit 29	1		19
11月22日	教科書 課題 Unit 9 予 習	1		20
11月22日 (12月6日)	単語テスト 準備 課題 範囲pp.214-235.	4		21
11月29日	NetAcademy2 課題 Unit 30	1		22
11月29日	NetAcademy2 課題 Unit 31	1		23
11月29日	教科書 課題 Unit 10 予 習	1		24
12月6日	NetAcademy2 課題 Unit 32	1		25
12月6日	教科書 課題 Unit 11 予 習	1		26
12月6日 (12月13日)	単語テスト 準備 課題 範囲pp.236-257.	4		27

12月13日	NetAcademy2 課題 Unit 33	1		28
12月13日	NetAcademy2 課題 Unit 34	1		29
12月13日	NetAcademy2 課題 Unit 35	1		30
12月13日	NetAcademy2 課題 Unit 36	1		31
12月13日	教科書 課題 Unit 12 ,13 予習	2		32
12月13日 (1月10日)	単語テスト 準備 課題 範囲pp.258-279.	4		33
平成25年 1月10日	NetAcademy2 課題 Unit 37	1		34
1月10日 (1月24日)	単語テスト 準備 課題 範囲pp.280-302.	4		35
1月10日	教科書 課題 Unit 14 予 習	1		36
1月17日	NetAcademy2 課題 Unit 38, 39	2		37
1月17日	教科書 課題 Unit 15 予 習	1		38
1月24日	NetAcademy2 課題 Unit 40	1		39

毎回、上記の「自学自習に係わる課題提出の一覧表」により学生に課題番号1～39と学習設定時間に基づき、学習させてから教員確認欄にチェックの押印を行うことで、学習におけるプロセス・コントロールとした。最終的には1冊のファイルに纏めることで、テスト対策ファイル兼JABEE資料とする。また、「到達目標」は「産業社会におけるグローバル化に対応するため、国際的に通用するプレゼンテーション能力を修得するための英語によるコミュニケーションに必要な基本的能力を身につける。そのために英文を正確に聞き取る力と読み取る力を身につける。」であり、それを達成するために「ALC NetAcademy2 TOEICテスト演習2000コース」(E-Learning)においては、テスト100(実施時間60分)による小テストを適宜行い、TOEICテストの予行演習とした。応用英語Ⅱの「評価方法」として、合格点は60点であり、後期試験結果を60%、単語小テストを20%、「TOEICテスト演習2000コース」小テストを20%で評価することとなっているので、全ての教材がフィードバック・ループを形成することで、学生全体のモチベーションを高めるためには有効であったと考えられる。また、本授業の受講前にTOEIC385点をクリアしていなかった学生における応用英語Ⅱの演習によるTOEICスコアへの効果等については、結果が分かり次第に報告する予定である。

4.2.2. 本科5年選択・上級英語

平成24年度本科5年を対象とした選択科目である上級英語（後期月曜日1, 2時限実施）においては、「世界の多様な国・地域の歴史・伝統・文化を理解する能力, 互いの意思を疎通できる実践的な英語能力を修得する。TOEICスコア400点以上を目指す。」ことを「授業の目標と概要」として、「授業の進め方」は「演習形式で行い, 2週に1回のペースで補助教材:「データベース5500 合格 英単語・熟語」(小森 清久 他 桐原書店)による単語小テストを実施する。尚, E-Learningは小テスト及び試験に使用する。必要により, 教科書: *Practical Reading Skills for the TOEIC Test* (Seiko Korechika 他 SEIBIDO) について小テストを行うことがある」としている。

そして, 上級英語においては, 専攻科進学予定の学生が, JABEE要件であるTOEICスコア385点未満の場合には同条件をクリアするために上級英語を極力受講することを薦めております。今年度5年生の専攻科進学予定の学生は20名おり, そのうちTOEICスコア385点以上の学生は6名ですので, 専攻科進学予定の学生14名は同条件をクリアするために上級英語を受講しました。それに加えて, TOEICスコア385点以上の学生2名も受講し, 専攻科進学予定でない学生8名を合わせた合計24名の学生が上級英語の受講を希望しました。

「到達目標」は「世界の多様な国・地域の歴史・伝統・文化を理解する能力, 互いの意思を疎通できる実践的な英語能力を修得する。実際のテストの形式に対応した教材を用いて各パートの演習をすることで, TOEICのスコアアップをできるようになること。」であり, それを達成するために「ALC NetAcademy2 TOEICテスト演習2000コース」(E-Learning)においては, テスト50(実施時間30分)による小テストを適宜行い, TOEICテストの準備とした。上級英語の「評価方法」として, 合格点は60点であり, 後期試験結果を60%, 単語小テスト及び「TOEICテスト演習2000コース」小テストを40%で評価することとなっているので, E-Learning, 教科書, 単語集の全部の教材がフィードバック・ループを形成することで, 学生全体のモチベーションを高めるためには有効であったと考えられる。また, 本授業の受講前にTOEIC385点をクリアしていなかった学生における上級英語の演習によるTOEICスコアへの効果等について, 結果が明らかになり次第, 報告する予定である。

4.3. 英検への取り組み

4.3.1. 本科2M及び2B・英語Ⅱ

平成24年度の2M及び2B「英語Ⅱ」においては, 英単語の小テストによりできるだけ多くの英単語を修得させることに加えて, 英文の長文読解を行う。また, 英検の演習を行い, できるだけ多くの学生に英検準2級を受験させることで能力の向上を促す。具体的には教材として, 教科書:「CROWN English Series [II] New Edition」(三省堂), 問題集:「英検準2級合格セミナー」(旺文社), 単語集:「新TOEICテストにできる順英単語」(中経出版)を使用して「基礎的な英語力の養成及び実用英語検定試験(準2級)程度の基本知識を身につける。」を「授業の目標と概要」としている。また, 「授業の進め方」としては「演習形式で行う。必要に応じて適宜小テストを実施し, また演習課題, レポート, 宿題を課す。」こととなっている。前期中間はゴールデン・ウィークに教科書Lesson 1及びLesson 2をレポートとすることで長文読解力の育成を試みた。そして, 英検問題集はLesson 1, 3, 5, 6, 8を演習した。前期期末は教科書Lesson 3, 4, 5を演習することで長文読解力の育成を試みた。また, 英検問題集はLesson 2, 4, 7, 10を演習した。後期中間は夏休みに教科書Lesson 6及びLesson 7をレポートとすることで長文読解力の育成を試みた。そして英検問題集はLesson 12, 14, 17, 10をレポートとすることで10月14日(日)における本校実施の英検受験のモチベーションを高めた。そして, 学年末(後期期末)は教科書Lesson 8, 9, 10を演習することで長文読解力の育成を試みる。また, 英検問題集はLesson 13, 15, 18を演習する。そして, 10月14日(日)における本校実施の英検1次受験学生は最近の経済状態の影響のためか少なく, 2M学生は準2級3名, 2級3名で, 2B学生はおりませんでした。10月14日に受験しない学生は1月27日(日)の英検を受験するように指導しました。ちなみに, 本校全体での10月14日における英検1次受験学生は準2級15名(1次免除2名を含む), 2級25名の合計40名でした。当日, 英検を担当している筆者が監督業務を行いました。英語Ⅱの「評価方法」として, 合格点は50点であり, 各中間, 期末の成績は, 試験結果70%, 小テスト・演習課題・レポート・宿題並びに授業態度を30%で評価しており, 合計で10回実施する英単語の小テストにおいて50%未満の点数を取った学生には一つの単語につき10回単語を書くレポートを課している。

4.3.2. 本科3M及び3B・英語Ⅲ

3M及び3B「英語Ⅲ」においては、次年度におけるTOEIC対策として、英単語の小テストによりできるだけ多くの英単語を修得させることに加えて、英文の長文読解を行う。また、できるだけ多くの学生に英検準2級もしくは英検2級を受験させることで能力の向上を促す。具体的には教材として、教科書：「CROWN PLUS English Series Level 4」（三省堂）、単語集：「新TOEIC テストにできる順英単語」（中経出版）は2年より継続使用して「世界の多様な国・地域の歴史・伝統・文化を理解する能力、互いの意思を疎通できる実践的な英語能力を修得するための基礎的な英語力を養成する。」を「授業の目標と概要」としている。また、「授業の進め方」としては「演習形式で行う。必要に応じて、適宜、小テスト、課題、レポートを課す。」こととなっている。前期中間はゴールデン・ウィークに教科書Lesson 1 及びLesson 2 をレポートとすることで、前期期末は教科書Lesson 3, 4 を演習することで長文読解力の育成を試みた。そして、後期中間は夏休みに教科書Lesson 6 及びLesson 8 をレポートとすることで長文読解力の育成を試みた。学年末（後期期末）は教科書Lesson 10, 11 を演習することで長文読解力の育成を試みる。10月14日（日）における本校実施の英検1次受験学生は例年に比べて少なく、3M学生は準2級6名、2級1名で、3B学生は2級2名でした。10月14日に受験しない学生は1月27日（日）の英検を受験するように指導しました。英語Ⅲの「評価方法」として、合格点は50点であり、各中間、期末の成績は、試験結果70%、小テスト・演習課題・レポート・宿題並びに授業態度を30%で評価しており、合計で10回実施する英単語の小テストにおいて50%未満の点数を取った学生には2年生と同様に一つの単語につき10回単語を書くレポートを課している。

5. 今後の展望：学生がモデルコアカリキュラム到達目標に達するための英語教育における検討事項

独立行政法人 国立高等専門学校機構の『モデルコアカリキュラム（試案）』が平成24年3月23日に刊行された。これは社会ニーズに応えるために高専教育の更なる高度化を目指して、国立高等専門学校機構における技術者教育の質保証のために学生の到達目標を明らかにしたものである。

5-3-2 Ⅲ-B英語（同書40頁）において英語

に関連した「専攻科の到達目標」が明示されている。それは「英語運用能力向上のための学習」の「オーラルコミュニケーション」における「相手が明瞭に毎分120語程度の速度で、自分や身近なこと及び自分の専門に関する簡単な情報や考えを話す場合、その内容を聴いて理解できる。」（以下でAとする。）「自分や身近なこと及び自分の専門に関する情報（例：実験成果など）や考えについて、前もって準備をすれば毎分120語程度の速度で約2分間の口頭説明ができる。」（以下でBとする。）「相手が明瞭に毎分120語程度の速度で、繰り返しや言い換えを交えて話し、適切な助言、ヒント、促しなどが与えられれば、自分や身近なこと及び自分の専門に関する簡単な情報や考えについて口頭でやり取りや質問・応答ができる。」（以下でCとする。）に加えて「英語運用能力向上のための学習」の「読み書きを通して行うコミュニケーション」における「毎分120語程度の速度で物語文や説明文などを読み、その概要を把握できる。」（以下でDとする。）及び「自分や身近なこと及び自分の専門に関する情報や考えについて、200語程度の簡単な文章を書くことができる。」（以下でEとする。）である。

一つ目の問題として、平成24年度時点において本校専攻科においては、B、C及びEに対応している授業科目が存在しないので、平成26年度までにこれらに対応する授業科目が必要である。二つ目の問題として、平成24年度時点において本校においては、「英語運用能力向上のための学習」の「読み書きを通して行うコミュニケーション」における「自分や身近なことについて100語程度の簡単な文章を書くことができる。」（以下でFとする。）に対応している授業科目が存在しないので、平成26年度までにこれらに対応する授業科目が必要である。（但しFはEに内包されるので、Eへの対応を行うことにより、Fは解決される。）

筆者は、諸事情を勘案して、B、C、Eに対応する専攻科の授業科目として、専攻科1年前期必修・応用英語Ⅰもしくは、今年度筆者が担当している専攻科1年後期必修・応用英語Ⅱが適切であると考え。それは、専攻科に在籍する全2年生が、専攻科2年前期選択・応用英語Ⅲを選択することは諸般の事情から難しい可能性が高いからである。具内容的には、B、C、Eを網羅する以下の内容を考えている。それは、「自分や身近なこと及び自分の専門に関する情報や考えについて、200語程度の簡単な文章を書くことができることに加えて、自分や身近なこと及び自分の専門に関する情報（例：実

験成果など) や考えについて, 前もって準備をすれば毎分120語程度の速度で約2分間の口頭説明ができ, 且つ, 相手が明瞭に毎分120語程度の速度で, 繰り返しや言い換えを交えて話し, 適切な助言, ヒント, 促しなどが与えられれば, 自分や身近なこと及び自分の専門に関する簡単な情報や考えについて口頭でやり取りや質問・応答ができる」授業科目である。換言するならば, 上記の条件の内容に沿う, 質疑応答を含めたプレゼンテーション演習の実施が想定されるのである。想定する授業の実施のためには, 「自学自習に係わる課題提出の一覧表」にB, C, Eに対応する時間を加えて準備する必要があると予想されるが, 平成25年度もしくは平成26年度より, 応用英語Ⅰの授業もしくは応用英語Ⅱの授業, あるいはその両方の授業において, 何らかの形態で質疑応答を含めたプレゼンテーションを導入することが望ましいと考えている。具体的な対応については他の条件を含めて英語科において検討する予定である。

参考文献

- 独立行政法人 国立高等専門学校機構 『モデルコアカリキュラム (試案)』 平成24年3月23日
- Pasi Sahlberg, Education Policies for Raising Student Learning: The Finnish Approach, *Journal of Education Policy*, Vol22, No. 2, 2007.
- Autonomy and Independence in Language Learning edited by Phil Benson and Peter Voller, Longman, 1997.
- 福田誠治 「フィンランドは教師の育て方がすごい」株式会社亜紀書房, (2009. 3)
- 小林 貢 『「国際的な情報発信のための e-learning による人材養成プログラム」に関する Learner Autonomy についての一考察』 秋田工業高等専門学校研究紀要 第45号, pp.93-98. (2010. 2)
- 小林 貢 『「国際的な情報発信のための e-learning による人材養成プログラム」に関する Learner Autonomy についての一考察Ⅱ』 秋田工業高等専門学校研究紀要 第46号, pp.95-101. (2011.2)
- 小林 貢 『「国際的な情報発信のための e-learning による人材養成プログラム」に関する Learner Autonomy についての一考察Ⅲ』 秋田工業高等専門学校研究紀要 第47号, pp.91-98. (2012.2)